第 11 回日本園芸療法学会大阪大会

大　会　長　　河﨑　建人（学校法人 河﨑学園 理事長）
副 大 会 長　　亀井　一郎（大阪河﨑リハビリテーション大学 学長）
副 大 会 長　　山根　　寛（日本園芸療法学会 理事、「ひとと作業・生活」研究会 主宰）
学 術 局 長　　寺山久美子（大阪河﨑リハビリテーション大学 副学長）
事 務 局 長　　谷口　英治（大阪河﨑リハビリテーション大学 作業療法学専攻長）
相　談　役　　酒井　桂太（大阪河﨑リハビリテーション大学 理学療法学専攻長）
相　談　役　　木村　秀生（大阪河﨑リハビリテーション大学 言語聴覚学専攻長）
事務局統括　　喜田　一也　　山埜　昌志　　佐波　　隆（大阪河﨑リハビリテーション大学）
事　務　局　　水野　貴子　　田崎　史江＊　村井　　恵　　＊学会コーディネーター

学会開催報告

2018 年 11 月 24・25 日（土・日）、第 11 回日本園芸療法学会大阪大会が大阪河﨑リハビリテーション大学において開催されたので、その概要を報告する。

1. 大会概要

テーマ：「園芸療法　これまでの 10 年　これからの 10 年」
会　期：2018 年 11 月 24 日（土）・25 日（日）
大会長：河﨑建人（学校法人河﨑学園 大阪河﨑リハビリテーション大学理事長）
会　場：大阪河﨑リハビリテーション大学 1 号館
参加者数：学会参加者数 188 名、市民公開講座参加者数 96 名の合計 284 名であった。

2. 大会の内容

本学会は大阪河﨑リハビリテーション大学が基幹校として準備が進められ、2018 年 11 月 24 日（土）･25 日（日）に本学を会場に開催された。

今年度の大会テーマは『園芸療法 これまでの 10 年これからの 10 年』であり、園芸療法に携わる実践者や研究者が集い、参加型シンポジウムを軸に、みんなで考える大会を目指した。

基調講演は、山根 寛先生（「ひとと作業･生活」研究会主宰）が「園芸療法　これまでの 10 年これからの 10 年」というタイトルで、学会設立から今までを振り返り、今後も療法として求められてくる園芸、園芸療法学会の役割、学会が抱える課題について講演された（11 月 24 日、1 号館 3 階大講義室）。

教育講演は、松尾英輔先生（九州大学農学部名誉教授）が「園芸療法（植物介在療法）の基礎 － 私たちを魅了する植物とのかかわり」について講演され、園芸療法の実践者らが行う『園芸活動』の源となる「植物とは切り離せない人間の生活」「人間と植物の関係」について振り返り、確認する機会となった（11 月 24 日、1 号館 3 階大講義室）。

市民公開講座では、「脳のお話～認知症と園芸」というテーマで、亀井一郎先生（本学学長、脳神経外科専門）に、認知症予防と園芸の関係を脳の働きを通して講演していただいた（11 月 25 日、1 号館 4 階第 2 中講義室）。

シンポジウムは、1 日目「日本園芸療法学会の歩みと展望」として日本園芸療法学会の理事 5 名（司会：山根 寛、シンポジスト：松尾英輔、浅野房世、高江洲義英、豊田正博）が、2 日目は「園芸療法を実践して～これから私が目指す

こと～」として関西で園芸療法を実践している園芸療法士5名（司会：田崎史江、シンポジスト：石神洋一、寺田裕美子、中西保太郎、川村明代）が、各々講演し、その後は会場の参加者と意見交換を行った（11月24・25日、1号館3階大講義室）。

研究発表については、11月25日に1号館3階大講義室にて口述発表17題、11月24日に1号館3階第1・2ゼミ室にてポスター発表9題、合計26題が発表された。

3. 大会スケジュール

第1日目　2018年11月24日（土）

13：00～13：15
　開会式　大会長挨拶・学会理事長挨拶
13：20～13：50　基調講演
「園芸療法 これまでの10年 これからの10年」
講師　山根 寛（「ひとと作業・生活」研究会 主宰）
14：00～15：00　ポスター発表・質疑応答
15：10～15：40　教育講演
「園芸療法（植物介在療法）の基礎 – 私たちを魅了する植物とのかかわり」
講師　松尾英輔（九州大学名誉教授）
15：50～17：50　シンポジウム1
「日本園芸療法学会の歩みと展望」
司会：山根 寛
シンポジスト：
　松尾英輔（九州大学名誉教授）
　浅野房世（日本園芸療法学会 理事長）
　高江洲 義英
　（医療法人和泉会 いずみ病院 理事長）
　豊田正博（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 准教授）

第2日目　2018年11月25日（日）

9：30～10：30　口述発表　第1セッション
座長：野尻 眞
　（医療法人白水会　白川病院理事長）
10：00～11：00　市民公開講座
「脳のお話～認知症と園芸」
講師　亀井一郎
　（大阪河崎リハビリテーション大学学長）
10：40～11：30　口述発表　第2セッション
座長：南風原 泰
　（社会医療法人栗山会　飯田病院　精神神経科部長）
13：10～14：10　口述発表　第3セッション
座長：土橋 豊（東京農業大学農学部 教授）
14：20～15：40　シンポジウム2
「園芸療法を実践して
　～これから私が目指すこと～」
司会：田崎史江
　（大阪河崎リハビリテーション大学）
シンポジスト：
　石神洋一（NPO法人たかつき　代表）
　寺田裕美子（笑福庭　代表）
　中西保太郎（株式会社　公文商会）
　川村明代（浅香山病院、NPO法人園芸療法と歩む会 理事）
15：50～16：00　閉会式　事務局長挨拶

4. 基調講演要旨

「園芸療法 これまでの10年 これからの10年」
講師　山根 寛

日本園芸療法学会は、2001年に人間と植物とのかかわりについての情報交換をはかりつつ、学術成果を高めるとともに、新しい学際分野の展開、人間の幸福への活用を目指すことを目的として設立された「人間・植物関係学会」を母体としている。2005年からは、認定登録園芸療法士の資格認定をした。2008年に園芸療法の専門性を求め、園芸療法の効果をエビデンスベースで研究するため「人間・植物関係学会」と連携を図りながら独立し、日本園芸療法学会となった。毎年開催される学術大会では、さまざまな分野での実践が発表され、学会員は、医師、医療・福祉・介護関係者、農園芸研究者、教育関係者、学生と幅広く、会員の研究、実践発表

を主とする学会を開催し、学会誌を刊行している。

5. 教育講演要旨

「園芸療法（植物介在療法）の基礎
　　– 私たちを魅了する植物とのかかわり」
講師　松尾英輔（九州大学農学部名誉教授）

日本に園芸療法が本格的に導入されたのは1990 年代である。国内に急激に広まり、学会の発足や資格制度の整備を要請する声が上がった。園芸療法の普及と定着には人間と植物とのかかわりの理解が欠かせないので、人間・植物関係学会を組織して、その部会で園芸療法の学習を重ねることとなり、2008 年に独立学会へと発展した。

園芸療法・植物介在療法の特徴は、園芸・植物とのかかわりの効用（恩恵、贈りものと呼ぶ場合もある）を療法的に活用することにある。なぜ療法的に活用できるか。それらを通して、癒し、悦び、愉しみ、期待、意欲などが得られ、心身だけでなく社会的にも単なる治療・リハビリにとどまらず、より健康に生きられるようになるからである。

どのような効用を私たちは受けているのであろうか。それらはお互いに絡み合っていて理解しにくい面もあるが、わかりやすくみると、次のように７つに分けてとらえることができる。①生産的効用：物や作品ができ、活動がうまく行く。②経済的効用：お金を稼げる、家計費の節約、居住地域や屋敷の評価が高まる。③精神的効用：癒し、喜び・愉しみ、意欲の向上、感性の触発と練磨など精神的によい効果をもたらす。④環境的効用：気持ちよい感情を起こさせる、物理的条件を快適にする、交流のきっかけをつくる場である。⑤社会的効用：人との話題や共通体験などで、交流を促すきっかけや場として機能し人間関係を円滑にする。⑥教育的効用：物や技術、伝統、価値観などを学び・教える媒体となる。⑦身体的効用：食べもの、嗜好品、薬となる、運動機能の維持･改善ができる、心理的快適感を通して、免疫力の増加など。

これらは複雑に絡み合いながら、私たちを癒し、悦び・愉しみを感じさせ、希望や意欲を与えてくれる。そのときに感じているのは、心地よさ、あるいは、快感　と呼ばれるもので、表情には笑みとなって表れる。この快感を味わうと、園芸や植物とのかかわりに魅了され、意欲的に取り組むようになり、支援者との信頼関係はより緊密になり、療法的効果が期待できるようになる。

6. 市民公開講座要旨

「脳のお話～認知症と園芸」
講師　亀井一郎
　　（大阪河﨑リハビリテーション大学学長）

認知症は「もっとも罹りたくない」とされる疾患の一つである。認知症の定義としては「思考能力、記憶、見当識などが、後天的に低下した状態」とするのが一般的である。

認知症有病率は、80 歳を越えると急激に上昇し、95 歳以上になると約半数が罹患するとされている。

本邦では 65 歳以上の高齢者のうち、2012 年時点で約 462 万人に上り、認知症になる可能性がある軽度認知障害（MCI）の高齢者も約 400 万人以上いるとされる。65 歳以上の４人に１人が認知症とその“予備軍”となる計算である。

認知症に関連する社会的問題としては、経済的コストや介護問題に加え、自動車の運転をめぐる問題、鉄道事故などをめぐる問題などがクローズアップされ、その対策は国民的課題となっている。

認知症には、脳の神経細胞が変性・脱落していくアルツハイマー病、レビー小体型認知症や、繰り返す脳梗塞ののち認知症状が発現してくる脳血管型認知症などがある。さらには慢性硬膜

下血腫や正常圧水頭症など脳外科手術で治療可能な認知症もある。

一方、園芸療法が認知症の進行阻止や症状の改善に繋がるという報告が相次いでいる。

また、行政が認知症に積極的に取り組み、これまでと異なる対策法を打ち立て、「認知症になっても楽しく生きる」ための活動を展開し、功を奏している。

7. シンポジウム１　シンポジスト要旨

7.1. 浅野房世（日本園芸療法学会 理事長）

日本園芸療法学会の前身は人間・植物関係学会である。浅野は、2006年から同学会（以下人植学会）において「園芸療法分野の切り離しを検討する部会」を務めた。切り離しの理由は、人植学会での発表や投稿論文に園芸療法関連が年々増加の傾向にあり、「人植学会は園芸療法分野のみではない」ことを示すため、また、人植学会が認定する園芸療法士の資格付与が、人植学会の主たる業務となることを避けるための2点であった。

数回の検討会の結果、2008年に園芸療法部門の独立が決定した。一方、切り離しはするものの、人植学会には園芸療法との繋がりを重要として「園芸療法検討部会」を従来通り学会内に存続させることに決定した。すなわち日本の園芸療法は“人間と植物の関係を実践、研究する”視点から生まれたということである。

私は、園芸療法の教鞭の傍ら、癒しの庭の設計を行ってきた。約四半世紀の間で、最も力を入れたのが、ユニバーサルデザインのモデルとなった「ふれあいの庭」（大阪府）と、治療と癒しのモデルガーデンとなった「ホスピタルパーク」（兵庫県）である。本学会設立準備および設立（2008年）は、この「ホスピタルパーク」に園芸療法士が常駐し、ボランティアが主体的に動き始めた頃である。

私のこれまでの10年は、大学での園芸療法の教鞭というソフトと、医療機関での治療や癒しを目的としたガーデン設計というハードであった。この病院（浅野氏が計画･設計に関わった関西労災病院）は急性期病院である。いかに早くリハビリテーションを始め、退院に至るかが病院の使命である。作業療法や理学療法が休みとなる土曜日・日曜日も自発的にリハビリテーションが行えるように庭を整備した。一方、地域の中核病院として、将来的にはがん治療にも力を入れていくとの計画から、植物による癒しの要素を患者と家族のために整備した。

オープン後十余年がたち、植物は根付き木々が立派になった。そして理学療法の一部が「あたりまえ」のように屋外で実施され、がん患者とその家族へのターミナルケアが庭で展開されている。

一方、これからの10年のために（実は、筆者自身のために）、自宅の近くにポケットパークを整備し始めた。山林の伐開と開墾、水平部分の整地、キッチン（小屋作り）、茶畑、レイズドベッド。すべて平均年齢75歳のリタイヤーメンバーの手作りで、「ゼロファーム」という。縁が０でも、お金が０でも健康と生き甲斐を創出できるという信念の名前である。

“自分で創るデイサービス”は、新しい園芸療法の役割になると考えている。自分の老後も踏まえ、自ら実験材料となるこれからの10年が楽しみでもある。

7.2. 高江洲 義英（医療法人和泉会 いずみ病院 理事長）

日本園芸療法学会は、松尾らによって組織された人間・植物関係学会（2001年）を母体として、2004年の国際シンポジウム（淡路）を経て、2008年に園芸療法部会から日本園芸療法学会として独立し発足した。以来10年の時の流れは、この領域がわが国の医療保健分野に於いて求められている領域として、毎年の年次総会・学会

を中心に発展してきた。今後さらにこの歩みを加速させ、広く深く普及発展していくことであろう。

わが国の精神医療・心の癒しの歴史を振り返ってみると、古来の湯治場などをへて、京都の岩倉にみられるように癲狂院（てんきょういん）への歩みに至る歴史があった。明治の文明開化は医療分野の改革ももたらして、松沢など各地の脳病院、精神病院への流れがある。その当時の立地はおおむね緑あふれる環境であり、加藤晋佐次郎らの庭園づくりなど、各種の環境づくりも行っていた。

戦後の日本は欧米文化の急速なとり入れにより、精神病院への閉鎖収容という道を辿り、医療環境も近代的なビルや駐車場へと変容していく過程を進めた。そのような時期に 1969 年に日本芸術療法学会が設立され、精神医療、臨床心理学を中心とした医療環境の在り方や表現技法が検討されるようになり、50 年の歴史が流れた。この間に演者は、臨床現場で人と人とを結びつけている「間合い」の構造に着目し、芸術療法の視点から、絵画、音楽、文芸、ドラマ、陶芸などの各種の表現をとり入れて、これらの諸技法を連携させた「統合的芸術療法」として模索してきた。その一つが園芸療法であって、病院の敷地内にバラ園を作り、松林の中での心理療法などを行ってきた。

園芸療法はこのような治療環境の流れに呼応しての 10 余年の展開を続けてきた。この先の園芸療法は医療・保健を超えて、心理・福祉・介護から健常者の住環境まで視野に入れた、幅広い活動のもとに多職種・多技法・多機能連携の時代を進むことになろう。つまり個人療法、集団療法としても、個人の意識、仲間との関係、自然との共生を考える心のエコロジーを中心として「生きられる時間・空間」を中心とした環境療法（milieu therapy）の方向に向かうであろう。

7.3. 豊田正博（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 准教授）

7.3.1. 実践力向上に向けて

1）アセスメント力

園芸療法士資格は能力保証書。園芸療法士として、同一対象者の健康上の課題やプラス、注目すべき事項はある程度揃うことが大切。そのためには、ICF を用いたアセスメントを教えられる指導者を増やし、彼らから学ぶ人が増えること。活動環境・栽培環境のアセスメント力もとても大切。

2）プログラム企画・実践力

活動環境と対象者の希望や健康状態から、植物による癒しをどのような順で提供するのかを考え、適切に実践する力をつける。

①園芸療法の 5 つの癒し

・心地よい緑の景観が人を癒す
・植物が人を癒す
・栽培が人を癒す
・植物を用いた創造活動が人を癒す
・人が人を癒す

②園芸療法実践のねらいとねらいにつながる場面の理解

7.3.2. 園芸療法士の活躍の場を広げるために

地域社会における園芸療法の可能性に目を向けよう。認知症予防や働き方改革を追い風にしよう。

7.3.3. 提案

1）ICF を活用したアセスメントの研修機会提供
2）園芸療法実習指導水準の標準化
　－活動チェックリストの活用－
3）園芸療法学習内容の標準化
　－シラバスの公開－
4）海外の園芸療法専門家や実践者との交流
5）園芸療法に関する若手研究者の応援

8. シンポジウム２　シンポジスト要旨

8.1. 石神洋一（NPO法人たかつき　代表）

私たちの法人では、2001年5月高齢者の介護予防通所サービス「街かどデイハウス晴耕雨読舎」を開業し、地域の高齢者の方を対象とした園芸療法に取り組みはじめた。その後、2007年に介護保険デイサービス「デイサービスセンター晴耕雨読舎」を開業し、要支援・要介護高齢者の方々を対象に園芸療法を活用した介護サービスを開始した。2017年には、一般住宅を活用した介護保険デイサービス「Roles晴耕雨読舎南平台」を開業し、ここでも庭を活用して園芸療法を実施している。

法人開設から現在まで17年間、要支援・要介護レベルの高齢者を主な対象として園芸療法を実践してきた。私たちは農園芸活動が生活の一部になり、それが生きがいとなって、それぞれの利用者さんの生活を豊かにしたいということばかりを考えてきた。

園芸療法を活用する目的は「Meaningful lifeの探求」である。これは晴耕雨読舎のミッションであり、利用者さんの残りの貴重な人生（＝時間）をいかに意味あるものにしていくのか、それを探し求めていくことが私たちの仕事である。

利用者さんにはそれぞれの人生があり、何をしたら「意味ある時間」となるのかは十人十色。私たちはMeaningful lifeの探求のためには何でもする、というスタンスで仕事をしており、利用者さんを中心に考えると、園芸療法は他の活動と同じで選択肢の一つに過ぎない。しかし、結果として園芸療法は活動の中心であり続けている。それは、利用者さんがやりたいと望むことであり、園芸療法によって利用者さんの生活が豊かになっているからである。

園芸療法には、人間の生活にとって必要な普遍的な価値があると考える。生命を感じること、生命を育てること、自然とふれあうこと、自然や生き物とつながること、植物を通して人とつながること、季節を感じることである。

利用者さんの生活を確かに豊かにしてきた園芸療法の本質的な価値を実感しながら園芸療法を実践し、社会にもその普遍的な価値を伝えていくことが、園芸療法を実践している者として今後目指していきたいことである。

8.2. 寺田裕美子（笑福庭　代表）

1990年代、園芸療法に出会い欧米での取り組みに触れ、日本で行う園芸療法はどのような方法、考え方、場となるのだろうかという問いをいまだに抱き続けている。それは単なる環境の相違による植物や嗜好の違いだけではない。私たちの暮らしの原点にある自然環境が住まい、街といった物理的・人的環境に関連して生活文化や、個人と社会の関係性、言葉、仕事や役割に対する価値観などといった多様な要素に長い時間をかけて影響を与えていることへの戸惑いだ。それほどに私たちの暮らしは自然環境との深い関係性に成り立った習慣と慣習がまだ残っている。その中に園芸療法を位置付けすることは壮大な問題だと頭を抱えてしまった。

古来より病の原因を「内因は心身疲労、怒、悲歎、陰陽二気不調、外因は風、寒、暑、湿等なり」と身体と外界環境および背景の統合的視点で捉え、平安都では都市を丸ごと健康に導くまちづくりを実践したが、近代では西洋医学の手法を極端且つ急務に取り入れ、社会的な価値観に浸透するまで受容した。1960－70年代に紹介された微生物学者のルネ・デュボスが健康・病の要因は環境との相互の関係性を指摘した視点に感銘しつつも、自国で具現化するに至れないもどかしさがあった。これは、私だけではなく、園芸療法を欧米で学んだ園芸療法士に共通する感情ではなかったかと振り返る。

2002年から5年間「人間性と創造」講座というタイトルで園芸療法に接続する方々と出会

い、現代人の心身の健康に関する課題に対応する園芸療法とはどういうものかを仲間らと問う場をもった。2001 年に ICF が採択され心身の健康と参加・環境因子・個人因子という「社会モデル」との関係性の見方は、園芸療法の対象者の課題の捉え方を後押しした。園芸療法士リア・マッキャンドリスは、「園芸療法士は、患者の自然界への気づきを広げる。眺めているものがよくわからないままに生活している人々の目を開かせる。植物を栽培する喜びと満足感という基本的な充足感を与え自分の概念を拡大させ高めさせる」という。これらの具体的方法として、「社会モデル」の視点から心身の健康にアプローチする園芸療法の実践が私の行く道であると考えている。

8.3. 中西保太郎（株式会社　公文商会）

8.3.1. 園芸療法の実践

1）リハビリテーション病院における園芸療法

①入職（2003 年）～ 2013 年

・故公文康先生のご指導の下、リハビリテーションの一環として園芸療法を実践。園芸療法の効果についてデータを収集、研究発表。

・故公文康先生の活動補佐。日本園芸療法学会事務局世話人。淡路景観園芸学校園芸療法課程講義およびその他講演活動の補助。

・病院周辺の緑地の維持管理作業。

② 2013 年～現在

・園芸療法の実践。OT スタッフとの連携、集団リハビリテーション。

・療養環境、職場環境としての緑地整備、維持管理、鯉や金魚の世話。

・園芸療法の広報、PR 活動、地域活動への参加。

2）NPO 法人園芸療法研究会西日本における活動

①事務局運営

②園芸療法・園芸福祉の普及・啓発活動

③園芸療法講座の運営（8 年目）

8.3.2. これからの展望と目指していること

園芸療法に携わるようになり 15 年が経過したが、現状は、まだ社会に認知されたとは言い難く、園芸療法士が正規雇用される職場も少ない。園芸療法講座を受講する人も減っている。もっと園芸療法を普及・啓発する活動に取り組む必要があるのでは。今後の活動として、

①園芸・植物の魅力、楽しさを伝える

②園芸療法・園芸福祉の実践者を増やす

③実践者の交流、ネットワーク作り、情報交換の場を提供

8.4. 川村明代　（浅香山病院、NPO 法人園芸療法と歩む会 理事）

私にとって植物を介した対象者との関わりの原点は、作業療法士になって初めて勤めた精神科病院である。作業療法士が一人しかいない職場で、植物や植物の栽培方法について教えてくださる一番の先生は、患者さんだった。

私が『園芸療法』を意識し始めたのは 3 ヶ所目の職場だった。開設準備を行っている時に、施設の図面に屋上庭園を見つけ、ここを活用し、高次脳機能障害を持つ利用者さんに役立てられるように、淡路景観園芸学校に通い始めた。園芸療法を学び実践していくうちに、利用者さんが植物の世話をすることで意欲的になったり、主体的に動けるようになったりするなど良い方向に向かわれたことで、私自身も園芸療法の良さを感じていった。

私は現在、再び病院で精神障害を持つ患者さんと関わっている。そこで長年、作業療法プログラムの一つとして行われてきた園芸活動に、私も入った。これまで野菜栽培中心だった菜園に季節の花を植えたり、新たに活動記録を取り入れたりするなど、園芸療法士としての視点をプラスして活動の幅を広げてきた。

作業療法士としても、園芸療法士としても、

「対象者の役に立ちたい。」という気持ちは今も昔も変わらない。園芸療法の効果は、事例を通して伝えていくことが重要である。しかし、エビデンスが少ない園芸療法の分野では、事例報告だけでは他職種や一般の方に園芸療法の良さを伝えていくには不十分である。園芸療法の効果を示すために、私は今も勉強を続けている。

謝辞

「2018年度の第11回日本園芸療法学会を大阪河﨑リハビリテーション大学で開催できないだろうか」と浅野学会理事長からお話をいただいたのは、2017年10月だった。

急遽、2017年11月に開催された愛知大会に参加し、開催者目線で学会を見てきた。メイン会場の使い方、参加人数、スタッフの配置、看板類の設置など写真を撮ったりメモを描いたり、できることをやってきた。

大会事務局を立ち上げ、何事も初めての状態で、周囲の方々にご迷惑をおかけしながら学会準備が始まっていった。学内の多くの教員･職員の方々から助言をいただいたり､皆様の貴重な時間を費やし、援助していただいて1年がかりで準備を進めてきた。学会前日には、職員の方が休日の大学を開けて学内を生け花で装飾して下さった。当日には、多くの教職員の方が休日にも関わらず出勤し、学生ボランティアの助けも借りて、大会を滞りなく進められるよう助けていただいた。おかげさまで、事故もなく、多くの参加者に恵まれ、大盛会となった。「会場設営の端々にも細かい気遣いやおもてなしを感じた」という参加者からの言葉もいただいた。

これまで、日本園芸療法学会は、その時々におけるさまざまな問題に取り組んできた。しかし、学会立ち上げ当初からのおよそ10年間、解決の道筋がいまだ明白とならない課題がいくつかある。それらの課題とは、「園芸療法士としての職場の確保」「園芸療法士の育成とスキルの向上」「園芸療法士同士の連携」等である。今回の学会がきっかけとなり、園芸療法実践者がつながり、各団体や組織と連携し勉強会や部会・委員会が設立したり、実践報告が学会の成果として保管されていく等、シンポジウム1で豊田先生から具体的に次の10年へと繋ぐための具体的に提言された内容もふまえ、これから日本園芸療法学会が変革していくことを期待している。

最後に、学会に参加いただいた皆様、講師・座長の先生方、開催に際してご後援賜った貝塚市・貝塚市教育委員会をはじめ、一般社団法人大阪精神科病院協会、公益社団法人大阪介護老人保健施設協会、公益社団法人日本認知症グループホーム協会大阪支部、公益社団法人大阪府理学療法士会、一般社団法人大阪府作業療法士会、一般社団法人大阪府言語聴覚士会、人間・植物関係学会、協賛いただいた病院・企業様各位、そして学会企画・準備・運営に携わっていただいた大会実行委員の教職員の皆様、学生ボランティアのご尽力に心より感謝申し上げる。　（文責：田崎　史江）

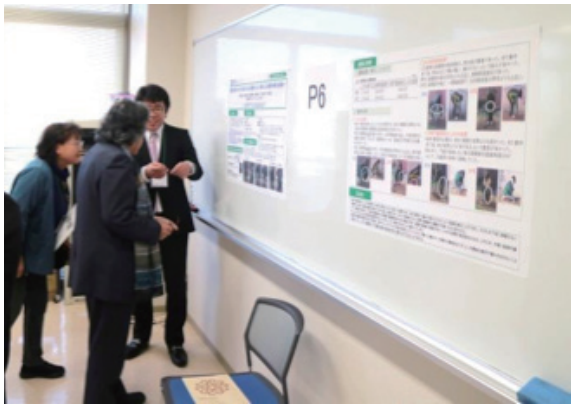
開会式　河﨑建人 大会長挨拶

開会式　浅野房世 学会理事長挨拶

基調講演　講師 山根 寛 副大会長

教育講演　講師 松尾英輔 学会名誉顧問

市民公開講座　講師 亀井一郎 副大会長



研究発表　ポスター発表

シンポジウム１

シンポジウム２